

(案)

オープンサイエンスの時代に相応しい「デジタル・ライブラリー」の実現に向けて
～ 2030年に向けた大学図書館のロードマップ ～

2023年1月に公表された「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について」(審議のまとめ、科学技術・学術審議会情報委員会オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会)において示されたように、「大学図書館は、情報やデータ、知識が記録されることを前提として、大学における教育・研究の文脈においてそれらの発見可能性を高め、アクセスを保証し、また利活用できるようにすることで継続的に知が再生産されるようなシステムを維持するために存在」している。この本質的な認識の下、大学図書館はこれまでも技術・社会の変化に対応し、この本質を実現するための変革を行ってきたが、これからも知の再生産という使命を果たしていくため、今日では、オープンサイエンスとデータ駆動型研究の推進、教育のデジタル・トランスフォーメーションに即した機能的変化が求められている。

この変化に対応して実現すべき大学図書館が「デジタル・ライブラリー」¹である。「デジタル・ライブラリー」の実現は、オープンサイエンスを実質化し、データ駆動型研究の基盤を提供するもので、我が国における研究成果の社会実装と研究力強化に寄与するものである。また、社会的要請であるリスキリングに対応して高等教育とその学修者が多様化する中で、いつでも、どこでも学ぶことを可能にし、学修者本位の質の高い教育・学修の実現に資するものでもある。

本資料は、このような「デジタル・ライブラリー」の実現に向けた当面の目標である「2030年の大学図書館の望ましい姿」を具体的に描き、「実現に向けた課題」を整理した上で、大学図書館のみならず、国、大学、大学図書館関係団体等が目標の達成に向けて、何に取り組み、段階的に何を実現していくべきかをロードマップの形で示すものである。

このロードマップにおいては、

- ・コンテンツの効果的な利活用に向けたデジタル化
- ・大学図書館の論理構造としての「ライブラリー・スキーマ」の明確化とそれに基づく大学図書館機能の実装

¹ ここで言う「デジタル・ライブラリー」とは、1990年代に盛んに議論された「電子図書館」構想を更に進めたものであり、コンテンツのデジタル化を経た結果として意識される、運営やサービス、職員の知識やスキルの変革などを内包する形で自身のDXを推進する大学図書館のことを指す。

- ・オープンサイエンスに係る支援等、今後求められる新しい機能に対応しうる人材の育成と、育成された人材の適切な配置を実現する制度

を優先的に取り組むべき領域とし、大学図書館等の連携を、これらを実現する上での有力な手段として位置付けている。なお、このロードマップは、今後の大学図書館を取り巻く状況の変化を踏まえて、適宜改訂を加えていくべきものである。

ここに挙げられている課題は、大学図書館だけで取り組むものではない。大学全体の課題としてマネジメント層に認識されなければならない、大学図書館以外の部署との協働・連携が不可欠である。このロードマップを手掛かりとして、各大学において、それぞれのミッションに相応しい大学図書館の実現に向けた取り組みがなされることを期待する。

2024年3月

「2030 デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会²

² 当検討会は、「オープンサイエンス時代の大学図書館の在り方について」（審議のまとめ）において示された今後の大学図書館の理念と方向性を踏まえ、より具体的な取組として明示するために文部科学省研究振興局長の諮問機関として設置されたものであり、2023年6月より「デジタル・ライブラリー」実現にかかる課題について継続的に検討をおこなってきた。